

# 栗野・徒然日記

四帖の式・春

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。  
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

## 2024.3.23 春の雪、霽、菜種梅雨



暑さ寒さも彼岸までというけれど、21日の朝、土筆が伸び切った野には雪が積もり、朝日に輝いていました【写真は、21日午前7時45分】。3月半ばには「春本番」の天気予報に騙されて、冷たい北風に体調を狂わせられました、さらにダメ押し。

翌22日は霜が降り、草浴びする雀が黒く見えました。季節は、「雀始巢(すずめはじめてすくう)」候。日差しに恵まれ、犬が散歩しない奥地にまで、土筆を摘みに行きました。その後が大変、3時間かけて、黙々と袴剥き。録り溜めた映画1本半分です。

一転、今朝は、霽(みぞれ)まじりの冷たい雨。高山では本降りの雪のようです。

明日も雨模様の予報。菜種梅雨とは言え、桜の開花も遅れ、春はまだまだ訪れそうにありません。体調にご注意のほど。



◀霽を置いたクリスマスローズの葉【3月23日午前6時54分】。



## 2024.3.26 「岩野田の歴史を語る会」・・・その功績



朝から本降り。庭のユスラウメが咲き始めています。昨年の今頃は満開だったのに、今年はやはり遅れ気味。冷たい雨に花びらを濡らしています。

季節は、「桜始開(さくらはじめてひらく)」候。でも、まだまだ栗野では固い蕾のまま。庭のユスラウメ【写真】の花は桜に、とても似ています。漢字で書くと山桜桃梅。古く中国語で桜は、ユスラウメのことだったとも。似ていると感じるのも当然ですね。

地域の郷土史がない、と残念に思っていたところ、「岩野田郷土誌」の存在を知りました。平成3年から29年にかけて活動した「岩野田の歴史を語る会」の記録や発行した冊子を中心にまとめられたものです。内容は、「沿革」に始まり、「年中行事」、「わらべ歌」、「昔話」、「方言」、「生息していた魚」などについて、資料とともに紹介されています。岐山高校郷土研究部による研究成果もまとめられています。

発刊当時(令和2年)、印刷・発行に要する費用は100万円を超えるということで断念し、旧会員以外には岩野田北小学校などに4部が保管されているのみとのこと。

大変興味深い内容なのですが、発刊のあいさつにも書かれているように、すでに会が解散している今日では、著作権の問題が重くのしかかってきます。ホームページで、紹介することが現時点では難しいでしょう。加えて、古老からの聞き書きも多いため、個人情報の問題もあります。著作権の問題を解決した上で、改訂版として、編集しない限り、再版は難しいかもしれません。まちづくり協議会に、文化・教育部会などを設置して作業することも、今後期待したいところです。

ホームページでは、地域の歌や方言など周知の事実のほかは、一部「引用」する参考資料として活用させていただきたいと思います。

栗野・徒然日記も、地域の自然や歴史の語り部になれる内容が積み重ねられると良いですね。

## 2024.3.28 異動の季節



県、市、警察、教職員の異動名簿が、入れ代わり立ち代わり地方紙の紙面を牛耳っています。従事者数の多いことでもあります。地域に関わりのある職だけに、関心も寄せられることもあるのでしょうか。

地域目線で職務を遂行していただける人材が期待されます。とは言え、どんな評価システムを用いても、適材適所の人事は永遠のテーマではあります。まして、地域との協働という視点は、まだまだ浸透していない感があります。余談ながら、名古屋市教委の寄付金と同時に校長推薦リストを渡す事態は別次元の話ですが…。

一方、地域でも、役員が交代する団体もあるでしょう。

行政も地域も、市の「[協働のまちづくり指針](#)」、[住民自治基本条例](#)を理解し、そして地区ごとの「[まちづくりビジョン](#)」を「我以外皆師」の知的謙虚さで携え、地域デビューし、新しいことにもチャレンジしたいもの(自戒を込めて)。

昨日、今年初めてツバメが三羽、休耕田の上をはずむように、仲良く飛んでいました。遠くから(異動ならぬ)移動してきたばかりでしょうに。

新年度の始まり、みんなが元気で楽しいスタートが切れますように。

【写真】庭の飛び石の間に咲いているヒゴスミレの花言葉は「謙虚」。

2024.3.31 黄砂



昨日から今日にかけて、黄砂が飛来している。土壌を肥沃にしたり、プランクトンの生育に役だったり、という良い面もあるようだけれど、花粉と相まって、やはり迷惑な代物。

それが、朧月、春霞と言い換えれば、風流なことこの上ない(発生地から遠い地ならではの春の風情)。

ただ、年々、黄砂がひどくなってきているとの報告もある。大気中の汚染成分の増加も気がかりだし、地球温暖化による降水量の変動も影響があるようだ。

「菜の花畠に 入り日薄れ〜♪」・・・朧月夜の歌が、いつまでも春を代表する風情豊かな曲でありますように。



## 2024.4.1 霧の朝

未明の雨も上がり、霧の深い朝を迎えました。

そんな日は、蜘蛛の巣にごく小さな水滴がついて、観察するのにうってつけ。この日は、通常の間網の巣より、ドーム状の立体型が、道路端の草むらに数多く浮かび上がりました。ちょっと感動。



▲視界不良。歩行者注意ののぼりが粟野台自治会によって立てられました。



▲立体型の蜘蛛の巣が道端いっぱい。



▲普通に間網の蜘蛛の巣もくっきりとキレイです。

## 2024.4.2 サプリメント



▲機能性表示食品、栄養機能食品の表示。色素に、ベニコウジが使われているカップ麺や菓子類も。

紅麴のサプリメントによる健康被害が生じ、死者まで出ています。メーカーのホームページには、現在もパッケージの商品写真がアップされています。商品名は“紅麴コレステヘルプ”。見出しに「機能性表示食品」、「健康系サプリメント」、「悪玉コレステロールを下げる、L/H比を下げる」とあります。さらに詳しい効用説明に常とう句である「体調に異変を感じた際には、速やかに摂取を中止し、医師に相談してください」とも。そして、下方に赤字で、「使用中止のお願いと自主回収のお知らせ」と記載があります。

近年、約3割の人が毎日利用、過去の利用も含めると約8割の人がサプリメントを服用していると言います。このうち、いわゆる保健機能食品には、保健効果が期待できるとして消費者庁が許可する「特定保健用食品」、科学的根拠にまでは至らないが一定の有効性が確認できるとして消費者庁が許可する「条件付き特定保健用食品」、そして特定の栄養成分の補給を目的とする「栄養機能食品」(消費者庁の審査不要)の3つがあります。

一方、事業者の責任において、特定の保健の目的が期待できる旨を科学的根拠に基づく食品として、消費者庁に届け出だけで表示できる「機能性表示食品」、科学的根拠があいまいな「健康系サプリメント」、さらには食品との区別すら不明な「健康食品」などがあります。

そもそもサプリメントそのものにも明確な定義がありません。特定成分が濃縮された錠剤等を一般的には指すようです。今回の健康被害を受けて、国においても、サプリメントをはじめ、健康食品も含めた表示に関する見直しが進むと思われます。

自然由来のものは、健康的なイメージですが、化学的根拠に加えて、あくまでも厳しい品質管理が必要なことは言うまでもありません。

紅麴は、様々な食品に用いられ、なので、我が家の加工食品やお菓子を調べてみました。着色料としても2品に使用されています。いわゆる天然着色料の赤色と言え、不気味なラックカイガラムシを思い浮かべます。半世紀以上前から、チョコレートのコーティングなどお菓子にも使用され、消費者団体が憂慮していました。今なお、使用されているようです。

加工食品を手取るたびに、使い放題の添加物に神経質にならないよう努める自分がいることに気づきます。しかし、食中毒などの予防につながるものはさておき、素材に敬意を払い、着色料やアミノ酸など添加物の使用は極力減らしてほしいけれど、色鮮やかなものに心動かされ、アミノ酸の味に慣れ切った消費者に、選択の下駄は預けられています。

「賢い消費者」・・・半世紀前の消費者運動のキャッチフレーズは、第2次オイルショック(1982年)以来の物価の急激な高騰を受けて、今や「価格優先の消費者」に変化しているかも知れません。



## 2024.4.6 朝靄(もや)の桜



▲朝靄の中にたたずむ姿も風情があります。ジョギングする人も、立ち止まって撮影。



▲移ろう季節の中で、咲く花もあれば、落花するものも。

朝靄の中、鳥羽川堤の桜並木が遅ればせながら満開を迎えました。昔は、4月の入学式ごろに満開になっていたのに、近年は3月に満開時期がずれ込み、卒業式の時期に満開になることも。卒業式と言え、小学校では、昨年あたりから男女ともに袴姿の児童がちらほらと見かけるようになったとか。そもそも保護者が卒業式に参列するようになったのは、いつからでしょう。成人式も、20年前は参列していませんでした。

日差しを受けて咲く桜もさることながら、靄に霞む桜もなかなかの風情があります。堤防に樹木を植えることは、堤防が痛むとの理由で、近年は禁じられています。

子どものころ、2回だけ、記念植樹をした記憶があります。1度は、町内会で長良川の堤防に桜の木を、もう1度は、児童として京町小学校の校庭に。どちらの記念樹も、しばらくした頃には、すっかり消え去りました。今も寂然としない気分です。

近年、記念植樹は、少なくなりました。枯れると植えた人には気の毒というのも理由の一つのようです。いずれにしても、将来にわたり大切に育てられる場所を確保することに留意が必要です。

山県市境に近い場所には、数本の並木が見られますが、いつごろ、誰が植えたものでしょう。



## 2024.4.12 モーニング



岐阜県の花、レンゲの季節。緑肥として使われ、郊外は一面レンゲのお花畑だった景色は、化学肥料の全盛の時代の到来により、とうに消え去りました。しかし今も当時のこぼれ種でしょうか、今も畔道などで細々と命を繋いでいます。

「レンゲはちみつ」は、近代養蜂発祥の地・岐阜の欠かせないブランドでもありました。栗野でも、昭和35年に桑原養蜂場(その後の椿商事)が養蜂を始めています。その系列の喫茶店「カメラリア」(スタート時は、岐阜市の都市景観賞を受賞した洒落な建物でフランス料理を振舞っていたと思います)が、突然休店したとか。最近、地元の喫茶店の休業が目立ちます。駐車場不足もあるのがもれません。また、老舗の和菓子屋も店を閉めました。こちらは後継者不足もあるのでしょうか。

コミュニティカフェ「[わおん](#)」で仲間の集まりがありました。お決まりのコーヒーにモーニング。この店では、“いつでも”モーニング(もっとも店は、午後2時半までの営業)が、飲み物込みで450円。

総務省が令和6年2月6日に公表した全国の都道府県庁所在市と政令指定都市の2人以上の世帯を対象に行った家計調査によると、喫茶代支出額において岐阜市は1世帯当たり15,099円で、4年連続で日本一に。その大きな要因として、モーニング文化が寄与しているのでしょうね。

普段、喫茶店を利用することのないのですが、翌日も打ち合わせで、中心部の喫茶店へ。続くものです。ここは、7時から11時までがモーニングタイム。

モーニングは、お得感もさることながら、飲み物だけよりも楽しく、話題も広がるような気がします。



▲「わおん」の“いつでも”モーニング。小倉トーストを選択しました。ゆで卵の代わりに茶碗蒸しが。



▲中心市街地のモーニング。ウィンナ珈琲にしましたが、レギュラーなら480円。シナモンはちみつのトーストにしました。

## 2024.4.13 ヌートリアとコイ



鳥羽川の黒木橋のすぐ下流にヌートリア出現。もう15年ほど前、末洞川の近くで農作業する人から、ヌートリアの被害にあっているという話を聞いた記憶がありますが、鳥羽川で見るとも含めて、栗野で見たのは初めてです。

コイとのお見合いのような写真が撮れました。

鳥羽川にの生き物も随分変化している気がします。以前見られなかったアメリカザリガニやヌマエビが増えています。魚の種類も激減した気がします。

[岩野田の歴史を語る会](#)の記録によれば、改修前には、タモロコ、ドンコ、シマドジョウ、カマツカ、ウグイ、マゴイなどに加え、天然記念物のネコギギが生息していたと言い、さらに戦前にさかのぼるとアユを見たとの話もあります。

いずれにしても30年前には、間違いなくフナ、ナマズ、タナゴなどなど沢山の種類がいました。

市街地の拡大と生活様式の変化は、地球温暖化以上に、川の質を急激に変化させています。

## 2024.4.22 路傍の花



◀ノチシャ。明治時代に初めて報告のあった帰化植物。目立たない小さな花が、外来種のイメージと違い愛らしい。

▶小さな白い花と言えば、セントウソウ。日本固有種です。



季節は穀雨。昨日から天気は下り坂です。72候では、葦始生(あしはじめてしょうず)。川辺の葦に生命の息吹を感じます。[鳥羽川堤の草花](#)の記録は、いったん区切りがつかしまったので、今度は路傍の花を記録していきたいですね。宅地化が進み、緑地の消滅が止まりません。堤防には外来種が生息を広げていますが、路傍の草花はどうでしょうか。皆さんからの情報もお待ちしています。

里の草花も気にかかる場所ですが、区画整理が行われていないにもかかわらず、低家賃の集合住宅が一気に増えている地域。30年後の地域を展望した時、どんなまちになっているのか、外来種にもまして、より深刻な「[まちづくりの芽](#)」であることを認識する必要があります。



## 2024.5.3 蛙始鳴の侯



72 侯は、「蛙始鳴」（かわずはじめてなく）」季節。今年もアマガエルたちは姿を現し、あちらこちらで鳴いています。

田んぼにも水が引かれて、田植えを待つばかり。

一方で、栗野の宅地開発には、拍車がかかるばかり。次々と田畑は造成されています。土地区画整理事業がなされていない地域なのに、戸建てはもとより、低家賃住宅が建ち並びます。もはや乱開発の様相に加え、緑地としての田畑は絶滅寸前。

都市計画の現況は、地域の大きな課題の一つです。[【岩野田北まちづくり協議会「まちづくりの芽」フェイル5 参照。】](#)



▲眉山が笑う季節・・・水田に水が張られ始めました。



▲地域の至る場所で宅地化が進み、田畑は肩身が狭そう。

## 2024.5.3 ゴールデンウィーク



▲長良公園に、心地よさそうに泳いでいました。



▲金華山の名の由来とも言われるツブラジイの  
開花は、ピークを過ぎていました。

さわやかな天気誘われ、長良公園までちょっとお出かけしました。新緑が輝く晴れ渡った空にはこいのぼりが泳いでいます。子ども連れで、大いににぎわっています。

すぐ近くの畜産センターには、足が向きません。豚コレラ以来、まったく魅力が薄れてしまいました。馬や牛や豚とまでは言わないけれど、せめてウサギなどの動物と触れ合ったり、バーベキューを楽しめるコーナーがあればまだしも、遊具も満足にないから。以前は県外からも多くの人出があったのが嘘のよう。宝の持ち腐れとは、このこと…。公園そのものが少ない私たちの地域にとっては、貴重な公共の施設なのに。

大がかりな再整備は、山県インターチェンジからのアクセス道路整備も含め、計画的にじっくりと進めてもらっても良いけれど、とりあえずできることはあるはず。

地域から[エリアマネジメント](#)の対象として、提起すべき時期!?

## 2024.5.5 立夏

蝶も恋する季節？ 写真のモンシロチョウは、どちらが雄でどちらが雌でしょう？ 雄は翅の黒い模様の幅が少し狭いらしいのですが、よくわかりません。片方の翅の色は少し黄色が掛かっています。どうやら色の違いは個体差のようです。しかし、肉眼では識別できないのですが、翅の色は違うとか。雌の翅は紫外線を反射し、雄の羽は紫外線を吸収するので、特殊フィルターの撮影すると、雄の方が黒っぽく見えるそうです。







▲せっかくの川も、眺めるだけの楽しみ方しかできないのは残念だけど…。

鳥羽川の河川敷も新緑に覆われ、野薔薇や黄菖蒲(アヤマ)、そして梅檀(センダン)が咲き誇っています。とは言え、河川敷に下りられるスポットは限られ、水辺に近づけないのは残念です。【[岩野田北まちづくり協議会「まちづくりの芽」ファイル2参照。](#)】

風に吹かれながら堤を散歩、河川敷の草木を観察…心地良い季節です。



▲ノバラの可憐な花が可愛いらしい。



▲水辺では、黄花のアヤマとノバラの競演。



▲高い枝に咲くセンダンの花も、堤防に届いてちょうどよい高さで鑑賞できます。とても良い香り。



▶岩野田北小学校のシンボルツリーのセンダンの大木も満開。【5月14日】



## 2024.5.16 時の移ろい...



栗野に越してきて40数年。田んぼに囲まれた地域ですから、見かけても良いはずの生き物の一つがタニシ。なのにこれまで、一度も出会う機会がありませんでした。てっきり、いないものと決め込んでいましたが、今朝、自宅近くの田植えが終わったばかりの水田に、何と沢山のタニシが!! いかに自然とは縁遠かった自分にショックを受けると同時に、なんとなくうれしくなりました。

ここ数年、農地の宅地化に拍車がかかっています。この水田もいつまで残るのかと思うと、一抹の寂しさを感じます。

緑地保全、乱開発の抑制は、単に感傷や景観面にとどまらず、地域の大きな課題であることを、地域が共有する時期ではないでしょうか。

何年か先に、後悔が残らないように。



▲タニシのいる水田に映る眉山  
【5月10日 4時45分】



▲朝日が差し始めました。【5月10日 5時3分】



▲風薫る心地良い風景です。  
【5月10日 14時35分】



▲何ということでしょう。あっという間に住宅が  
建ち始めました。【5月15日 14時23分】



## 2024.5.21 蚕起食桑（かいこおきてくわをはむ）



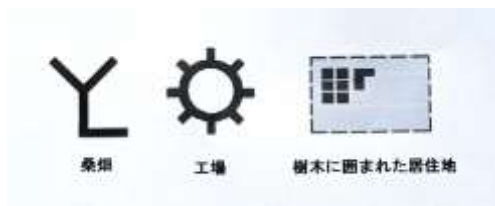
季節は「蚕起食桑（かいこおきてくわをはむ）」侯。暖くなり、蚕が桑を盛んに食む時期だったのでしょう。この時期は、田植えも始まり、農家は寝る暇もなかったことでしょう。

鳥羽川の堤で、桑の木を見かけました。ヤマグワと思われます。中国原産のマグワとともに、蚕の食草として栽培されたようです。

半世紀前は、市内でもあちこちに桑畑が見られたものですが、今では壊滅状態。桑の一本立ちも最近は見ることがほとんどなくなりました（県内の繭の収量は、昭和34年に3,870.8トンであったのが、令和2年には0.9トンにまで減少しました。ちなみに、伊勢湾台風が襲来した昭和34年は、地方都市にとって大きな変化の曲がり角であった気がします）。

ところで、子どもの頃、社会科の授業で桑畑の地図記号を習った記憶がありますが、平成25年に使われなくなりました。同じく消えた記号に、煙突マークの工場があり、環境配慮の面もあるようです。一方、樹木に囲まれた住宅地もなくなりました。環境面では意義があるけれど、歴史的成り立ちまで判別するのは難しいかもしれませんね。世につれ、地図記号も変化し続けています。

自給率の向上は、重要な国のテーマです。農地整理、機械化そして化学肥料の使用などで、農作業の効率化が飛躍的に向上する一方、農業経営は厳しい現況に置かれています。自給率向上は、我が国の重要テーマであるにも関わらず改善の兆しはありません。まさかとは思いますが、田の地図記号までがなくならないのを願うばかりです。



▲河川敷にもヤマグワが成長。



▲田植え前の代掻き【6.5.18】



▲田植え【6.5.25】





◀来年も、見たい風景です。



▲カモが2羽。



▲ツバメが2羽。

## 2024.5.24 路傍の花～その2～



▲黄金に色づいたコパンソウは、今が見頃。



▲コパンソウに混じって、ヒメコパンソウも生えていました。振るとシャカシャカと鳴るので、スズガヤの別名があります。



コバンソウが黄金色に輝いています。形もさることながら、色も小判ですね。明治時代にヨーロッパから、観賞用に持ち込まれたものが、今では普通に道端に生えています。そう言えば、子どもの頃、伊奈波神社の参道に市田(いちだ)という菓子店があり、その名物が「小判焼き」でした。その後、「大判焼き」に名称を変更(大きさは変わりませんが)。コバンソウは別名、俵麦とも言うそうです。確かに俵に似た実をぶら下げています。

道端には、季節ごとに草花が次々と花を咲かせています。目立つこともなく、見慣れた光景だけに、つい見過ごしてしまいがちですが。

ちなみに、犬やキツネなどの名前が付けられている植物も多く見られます。

鳥羽川の植生に続く第2弾として、栗野の路傍の植生図鑑がまとめられると良いですね。

(その1は、4月22日の日記に綴りました。)



▲田んぼの端に、ヘビイチゴが実をつけています。



▲コメツブツメクサもヨーロッパ原産。



▲キツネアザミ。鳥羽川の堤でもわずかに見かける。



▲イヌガラシ。辛子のような辛みがある。



## 2024.5.28 走り梅雨



▲ホタルを花に閉じ込めて光を楽しんだというホタルブクロも雨に似合います。



▲ハナザクロは、雨にも五月晴れにも似合います。



▲ハナミズキの幹に絡ませた小輪のクレマチスが満開。多肉植物の赤いハナキリンは、雨の時は軒下に取り込みます。



▲▲水盤に浮かべたバラ(アスリートスペースストライプ)とシャスターデージー、クレマチスの種。



▲アジサイも咲き始めています。



▲走り梅雨に合わせてるように、クチナシが咲き始めました。

激しい雨が降り続いています。おまけに小さな台風並みの風。テレビの天気予報は、雨への注意に終始し、吹きすさんでいる強風のことはほぼ無視。ワイドショーの台本には、なかったらしい。

次から次へと咲き誇ってきた花々も、濡れ滴っています。旧友の詞曲に「花の季節の後を 雨がやさしく追いかけてゆく」というフレーズがあって、とても気に入っていて、この季節になると、ふと思い浮かんできます。

ハナザクロは、小さいながらも華やかで、品も漂わせています。随分と長く咲いてくれています。梅雨までは持たないでしょうね。詞の雰囲気にもマッチした花の一つです。

彼の歌に「雨の街」という、岐阜市制 100 年を記念して、岐阜市が公募したマイソングに入賞した曲があります。

「雨降る街を当てもないまま 濡れて歩くの一人ぽっちで 夕暮れ時のビルの街 帰りを急ぐ人の波 何もかもが雨に流され消えてしまえば 良いだろな(リフレイン)・・・並木の下で濡れてる仔犬 こんな私にも甘えてなくわ・・・夜明けの空 一羽の鳩が 立ち止まった私に言うの 寂しがり屋はお互い同士 温め合って生きてゆく(リフレイン)」♪

まだ 10 代。ガラス細工のような感性が滲んでいます。

当時は、学生運動もやや下火になっていましたが、それでも闘争に巻き込まれ、キャンパス内で学生の命が失われることがありました。一方でノンポリが増えるとともに、構内に、原理研究会の大きな看板が新入生を誘っていました。

まだ花の季節、そして走り梅雨の一日。